

# 私の博物誌

題字 石川進

## 第二十六回 「冬の客」

珍しい来客に気付いた。私は折良く休息の時分だった。古い椅子に掛けて、いつものように窓を透かして視線を移すと、サッシの外側に珍客の顔がこちらを向いている。私の目と彼女の目が合った。十一月も最終日が明日になった日の午後のことだ。

窓外の彼女の様子は、少し弱ったように見える。窓枠にすがるようにして体を揺するのが分かったが、少しの間目を離すと視界から消えた。彼女は、産卵を終えた大蠋螂だった。

豊かな自然が残る山中での生活は、春夏秋冬の移り変わりを注視しなくても教えてくれる。

本当の冬を迎える午後の三時を廻ったころの出来事を、今書いている。まだ外の明るさがまさっているため、彼女はシルエットとして私の目に入ったという寸法だ。好きで移り住んだ自然の中の営みは、畏敬の念を抱かせると同時に、好奇心をも満

たしてくる。私にとっては大いなるミクロ・コスモスなのだ。

玄関の出入りの時に見かける、沢山の生き物たちの在り様は、生きるということをそれぞれが真剣に考えさせてくれるのがある。

シルエットは既に産卵を終えたことを示して、腹部は萎んでいる。更に、産卵後の彼女の命は残りも少ないのである。すっかり冬に囲まれた我が家の庭を移動し、柱を伝い、地上二メートル程の場所に辿り着いたというのが、今日の彼女の行動の総てだったのだと思う。

毎年のことだが初冬のころになると、蠋螂の卵塊が小さな庭で見られる。何種類かいるのだが詳細は止そう。触れると焼き魅のようにゴワついた、一種独特のもので、この地方の子ども等は私も含めてカラスの〇〇タマと呼んでいた。別に何をするではなく、篠竹や芒などの茎に産み付けられて



冬のある日、我が家の窓に訪れた「珍客」

硬化したものを剥がして、放ってしまうだけのものだった。蠋螂は一年だけの生命を充分に生き、子孫をカプセルに残して死んで行くのが運命の昆虫であることは周知であろう。死骸が少ないのは、鴉や隼などが処分してしまうらしい。春になると、一つの卵塊から数十匹の仔虫が生まれるのだが、不完全変態の彼等は前幼虫と呼ばれる。そろそろと這い出る彼等に、私は心の中で声援を送る。冬を迎えるまでの一年を、同じ場所での生活を共にして来た者同志として嬉しいものなのだ。全てではないらしいが、交尾の後、雄は雌に喰い殺されることで産卵の為の栄養となることも摂理なのであろう。

自然の推移を見守り、受容することを心情として私は日々を送るのだが、若かった頃のこと、秋の稔りの節には、私たち夫婦と亡くなった母と二人の子供の五人連れで、何度か蝗を採ったことがあった。勿論食べるためで、母も妻も食物としての蝗の扱いは上手かった。話は矛盾するが、私たちは蝗を採りながら大蠋螂が秋苗を獲らえた瞬間に居合わせたことがあり、私は秋苗を逃がした。今でも時折その光景を思い出し、済まないことをしてしまったと思う。今日のように弱った蠋螂を見ると、こと更にその想いが深い。

話は変わるが、私の最も尊敬する書道史学者であり、書家でもあった西川寧博士も「蠋螂」を篆書で五点揮洒されていて、一点のみ実見している。ご自宅の庭で偶然見つけた蠋螂に触発された旨の文章が随筆集に在り、時折、頁を繰って博士の心境なども推測しながら、今日の蠋螂を見ていた。ここに登場する三匹の蠋螂は、ほぼ四十年の中での話であるが、生命とは小さいながら何とエネルギーに満ちたものなのか改めて感動する。



玄関先の植え込みに残された、蠋螂の卵塊



書いている人

石川進

いしかわ・すすむ

一九四二年、いわき市平生生まれ。石川紋店代表。家業のかたわら、幼少から書に親しむ。書の世界で培った点・線・面と墨・紙・水の生理を追求し、石刻による印とのコラボによる抽象、具象の絵画表現を展開。書学書道史学会会員、書法探求顧問

企画、営業、DTP 制作募集

ここには“汗”がある。

■お問い合わせは■  
TEL(0246)29-2424  
E-mail:read@iwaki-j.net

(株)いわきジャーナル  
〒971-8141  
福島県いわき市鹿島町走熊字小神山29  
(ヤスミズ第1ビル2-A)

刊いど

Super ViO 30

土木建設機械・販売・リース

株式会社 協和機工

KYOWA

代表取締役 大淵 利男

〒971-8143 福島県いわき市鹿島町下蔵持字戸の内70の1  
☎(0246)29-4100(代) FAX(0246)29-4200

故人を送る厳粛な儀式。祈る心を真心こめて  
やすらぎの杜遠野がお手伝い致します。

■法事会館及びホール

やすらぎの杜遠野

〒972-0161いわき市遠野町上遠野字赤坂27-1  
TEL.0246-89-4777